

うちはレイ

神威

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

旧世紀、無数の隕石が降り注ぐ未曾有の大災害「落星雨（インベルティア）」の影響により生まれながらに驚異的な身体能力を持つ新人類《星脈世代（ジェネステラ）》が誕生した。

しかし落星雨という無数の隕石が降り注ぐ未曾有の大災害が起きる遙か昔にうちはと千手が存在したらのお話。

目次

プロローグ	1
第一話	6
第二話	18
第三話	26
第四話	37
第五話	44
第六話	52

プロローグ

今宵は満月。一人の少年と三人の少女は、暗い森の中ある者達から逃げ回っていた。真つ黒に染まった黒髪に漆黒のように瞳を特徴した少年。その少年と一緒に三人の少女がいた。一人は明るい紫色の髪を持ち、美しいアメジストの瞳をした少女。もう二人は栗色の髪で赤い目をした少女に碧色の瞳と鮮やかな薔薇色の髪を持つ少女。背後から迫り来る謎の仮面を被った者達から命を狙われ、少年少女は無我夢中に走る。

森が抜けた先は、満月の光が照らされそこには謎の仮面を被った者達がいた。そして背後から来る者達に追いつかれ少年らは囲まれた。

「くっくっ」

少年は刀を抜刀し、瞳孔が動き変化を見せ三つ勾玉模様を見せたと思えば、目が赤く染まり光る。

二人の少女も戦えない少女と少年を守るため、警戒態勢に入る。

「……」

「……」

先に動き出したのはあちら側だった。敵達は、刃物で切り掛かる。

易々と接近に許すはずもない少女は、距離を詰められないように発砲する。

しかし少女の死角を入り、戦えない少女の背中を切ろうと襲いかかる。

「……！」

そこには刀で受け止めていた少年がいた。

「……!? ありがとうレイ」

「……礼はあとだ」

少年は刀で敵を薙ぎ払う。再び数多の刃物が少年達を襲う。

数で押し切られ防戦一方。これではいずれ全滅してしまうと考えた少年は、とある案

を思いつく。

懐から煙り玉を取り出し、三人の少女を抱えこの場から抜け出す。

敵から見つかからないように上手く茂みに姿を隠す。少年は少女に言い渡す。

「……シルヴィ、ユリス。オーフェリアを連れて逃げろ」

「!? い、嫌だよ！」

「正気か!？」

「……大丈夫。絶対に後から追いつくから」

「で、でも！」

「頼む」

「……分かった。絶対に追いついて来てね！」

二人の少女は、渋々と少年の言う事を聞き、そう言い残し片方の少女の手を取り逃げ出す。

「……」

少年は、敵が来るのを待ち構えていた。しかしいくら経っても敵が現れる気配がしない。

「……!? ま、まさか！」

少年は、最悪の考えが脳裏に浮かび上がる。急いで二人が逃げた道を辿り、全力疾走で追い掛ける。

「頼む！ 間に合ってくれ！」

今の少年の心は、焦燥感と恐怖感で満ちていた。大切な人が殺されるといふ最悪な展開にならない事を強く願って。

*

段々と距離が近づくにつれ鉄分を含む血の匂いが強くなった。

最初に目にしたのは、木の幹に何者かの血が張り付いた跡だった。その木の奥には三つの影が見えた。恐る恐る影の正体を見ると、そこには横たわる“大切な三人”だった。

少年は急いで二人の元に着き、腕に抱え状態を確かめる。それは痛々しい姿だった。

三人は、眠っているかのように瞼は閉じていて口の端からは生々しい血が垂れ流しており、胸は背後から刃物で貫かれたような大きな傷があり、そこから溢れる出るように血が出て、小さな血の池が出来ていた。

「……!? おい！ おい！」

必死に三人に呼びかけるが、反応はなかった。

少年は、生きてる事を確認する。

「……!?」

三人の首筋を触れたとき、脈はなく体温は感じられなかった。

「……………」

少年の両目から大粒の涙があふれだし、三人をそつと抱きしめ泣き崩れる。

「っ!!」

自身よりも大切だと思った三人を失った少年は、とてつもない喪失と絶望という負の感情によって押し潰れそうになる。

「……………」

いつの間にか両目から流れ出る大粒の涙は血涙に変わり、少年の瞳には三つ勾玉模様から三つの影に変わり渦を巻くような模様に変形していた。

変わっていた。

「こ、これは」

「——『万華鏡写輪眼』」

妙に威厳と落ち着いた声が少年の耳に届く。声の方に振り向くと何時の間にかドアが開いており、そこに立っていたのは着物を着た三十後半くらいの年をした男性だった。

「開眼したようだな……写輪眼と同じように解けば元に戻る」

声の正体は、少年の父『ヤヨイ』だった。彼の言われた通りに少年はいつものような感覚ですると、瞳は本来の黒目に戻った。

「レイ、居間に来い。話がある」

「……？」

普段のヤヨイは、修行以外はのんびりしていたがその面影はなく、いつも無く真剣な表情だった。

「もう察していると思うが、話というのはお前の万華鏡写輪眼についてだ」

「……その言い方だと父さんの仕業？」

目を半目にし、レイは言う。ヤヨイはレイの言葉を聞き、ふと口端が上がった。

「ふっ……ああ」

「……………んであの夢……………違うな、幻術？」

ヤヨイはそつと目を閉じる。目を開けると、風車のような風魔手裏剣のような形に、その周りに三つの穴が空いた勾玉模様が配置された瞳がそこに写っていた。

「俺の万華鏡の瞳術の一つである『月読』をお前に仕込んでおいた」

「……………？」

「昨晚見せただろ。その時だ」

「……………どうやって」

「『転写封印』という術知ってるか？」

(……………確か瞳術の効力を写輪眼に封じ、任意の条件下で発動するように仕掛ける術だったか？……………なるほど)

「……………そういうことか」

「転写封印で俺の月読の瞳力をお前の写輪眼に封印し、意識を失った時しばらく時が経つと発動するよう仕込んだ」

「…………………………」

「……………ここまで来たら、分かるだろ？」

ヤヨイはそう言いながら目を閉じ、目を開けると元の黒目に戻っていた。

「……ああ。月読は“実際に体験していると錯覚させる術”。要するに疑似体験で無理矢理万華鏡写輪眼を開眼させた」

レイは憎むような恨めしいような目で、ヤヨイを見る。

「正解」

「……何故こんな事を」

「それは……」

「……それは？」

「………今は言えない」

「……何だよそれ」

「いつか話す。でも力は手に入れて良かっただろ？」

「……」

「ま、現実では亡くすなよ。そのために疑似体験で開眼させたのだから」

「……ああ。何が何でも俺が守ってみせる」

「それと忠告しとく、万華鏡写輪眼を使えば使うほど視力は低下していき、やがて最後は失明することになるから使い方には気を付けろよ」

「……ああ」

「さて話は終わりだ。戻っていいぞ」

レイは腰にかけていたソファアールから立ち上がり居間から出ようとしたその時に。

「……あ、待てレイ」

ヤヨイの呼びかけに止まる。

「？」

「お前明明後日は、”アスタリスク”に行け」

「……唐突だな」

「俺が手続きしてやる。何処がいい？」

「……正導館がいい」

「何でだ？」

「……なんとなく？」

*

飛雷神の術で故郷に帰ってきたレイとヤヨイは、縦三メートル、横二メートルくらいの幅をした扉で大きな門の前に立っていた。その扉には、右にうちわのような形をした家紋と左に金剛杵のような形をした家紋が描かれていた。

「……」

「帰って来たな」

レイはヤヨイの言葉に無言で頷く。

故郷は森林に囲まれていて、うちは一族の村であり、千手一族の村でもある。

「……」

「俺が印を結ぶとしよう」

ヤヨイは扉の前に立ち、複雑で長い印を結び始めた。結び終わると、閉じていた扉が徐々に開きだした。

「……」

「よし、開いた。入るぞ」

レイとヤヨイは、「扉をくぐり抜ける。

「お、レイにヤヨイさんじゃないですか。遂に帰ってきたんですね」

レイとヤヨイに話し掛けて来たのは、服の背中にうちの家紋を入れた、三十前半くらいの歳をした男性だった。

「久しいな」

「……お久しぶりです」

「あれから五年経ったか？ レイは背が伸びたな」

「……どうもです」

「貴方は……変わってないですね、ヤヨイさん」

「うっせ」

「……父さん、早く戻らないと」

レイはヤヨイにそう呼びかける。

「おっと、そうだった。じゃ、俺とレイはここで」

「おう、またな」

「……失礼します」

レイとヤヨイは男性と別れ歩き出し、雑談しながら帰っていると目的地にたどり着いた。

「ただいまー」

「……ただいま」

「お帰りなさい。あなた、レイ」

そう玄関で迎えてくれたのは、エプロンを着ていた女性であり、その女性はレイの母である。ユウカだった。

「ああ、ただいま。ユウカ」

ヤヨイはユウカに微笑み、抱擁する。

その光景に見ていられなかったレイは、気まづく感じ取ったのか靴を脱ぎ、そそくさ

逃げるように階段へ上っていった。

「ははっ！ あの反応、昔のユウカとそっくりだったな！」

「むっからかわないで下さいよ。あなた」

ユウカは頬を染め、ふて腐れるように言う。

「ま、そういう所含めてお前を愛しているがな」

「……わ、私もあなたを愛しているわ」

「ありがとうな」

そそくさ逃げるように行ったレイは、実家の私室に足を踏み入れ、吐息をする。

(……全く、父さんと母さんは相変わらずの仲が良い夫婦だ)

そう思いながら、背中からついているリュックを下ろす。そして懐から巻物を取り出

し、それを広げ、印を結び巻物に手をかざす。

「……口寄せの術」

出てきたのは、先程巻物に封じていたベッドだった。口寄せしたベッドを部屋の隅に移動させ、そのまま力が抜けたようにベッドに倒れる。

万華鏡を開眼した反動により、身体と精神に大きな負担がレイにかかっていた。

(……万華鏡の開眼した影響がここまで大きいとはな)

「……まあ、その内回復するだろ」

レイは重たい瞼を下ろし、再び眠りについた。

*

レイの両親であるヤヨイとユウカは居間にいた。

ユウカはローソフアーの上にとんび座りで座っており、その膝に頭に乘せて体を横にしているのはヤヨイだった。所謂、膝枕というやつだ。

「……」

「時空間忍術の様子はどう？」

「ああ、恐ろしい程に成長して行つたな。今じゃ時空間忍術をあそこまで使いこなせるのはレイしか居ない」

「……あなたでも？」

「ああ、それに時空間忍術だけではないぞ。単純の速さでは多分うちはと千手の中……いや全人類含めてあいつは世界一だ」

「……流石に、それは言い過ぎじゃないの？」

「ははっ！ 流石に世界一は言い過ぎた。でもこれだけは確信できる」

「……？」

「あいつは、うちはと千手の歴代最速の男だという事」

ユウカはヤヨイの言葉に目を見開き、驚く。

「まだ詰めが甘い所もあるが」

「……時々、動きが単純な時がある事かしら」

「流石剣術の達人。あいつは、焦ると攻撃が単調になるんだよな」

ユウカは剣術の達人である。それはもう天賦の才能の持ち主であり、剣術ではうちは最強と言われている程の実力者だ。

「それについては、私が言っておいたわ」

「ん？ だから日が経つたびに焦る回数が減っていたんだな」

「ええ。私が剣術を教えているのよ？ 焦りは最適な判断が出来ないからね」

週1に実家に帰ってくるレイにどうやらユウカが剣術を教えていたようだ。

「レイの精神と剣術の修行はユウカが適任だからな。そっちは任せるよ」

「ふふっ任されました。そういえばあの子はどうしたのかしら」

「寝てると思うな。万華鏡写輪眼の開眼による反動で寝てる」

「!? 大丈夫なの？」

「大丈夫かどうかはあいつ次第」

ユウカは心配するような顔をし、それに気づいたヤヨイは片方の腕を挙げ、ユウカの

頬に触れる。

「俺達の息子を信じよう」

「……そうね。私達の子だもんね」

「ふう。よし、この話はここで終わり！ ……あ、ユウカお腹が空いたんだけど、飯
ない？」

真面目な雰囲気からヤヨイの発言に気の抜けた雰囲気変わった。

「あなたのそのマイペースは変わらないわね」

ユウカは呆れてため息を溢す。

「じゃ」

「……褒めてはないわよ」

「ごめんごめん」

カラカラと笑いながら謝っているがどうも反省している様子ではないヤヨイを見て、
ユウカは微笑むのであった。

第二話

「正月には戻ってくるんだろ？」

「……………うん、まあ大体そのくらいには」

レイは靴を履き、立ち上がる。

服装は普段着ではなく、星導館学園指定の制服だった。その制服の左胸元には、赤い蓮の花の形をした校章が付けられていた。

「……………じゃあ行ってくる。父さん、母さん」

「ええ、行つてらっしゃい」

「おう。行つてこい」

二人のその言葉を聞き、荷物を持ち上げ家を出た。

「……………行つたわね」

「ああ」

「ハルトには伝えたのかしら？」

「……………忘れてた」

ユウカはジト目にし冷ややかな目線でヤヨイを見る。

「だ、大丈夫だろう」

「……」

「……すまん」

ユウカのジト目に耐えられなかったヤヨイは謝罪をする。

「……はあ、まああなたですから」

「え、それで、すまされるの？」

「……怒りたいの？」

「あ、はい。すみません」

*

日はとつくに暮れており、現在レイが乗っている船は、霧が少し残る海上をゆつくりながら進み賑やかなその都市へと向かっている。

「……」

そそびえ立つビルやそれに映る広告、そこには人気のアイドルなどの曲が流れてあった。

「……『シルヴィ』」

その広告を見ると幼なじみであり、今は世界の歌姫と呼ばれる程有名になった少女の呼び名を口に溢す。

(……やつと着いた)

港に降りたレイは背伸びをしながら周りを見渡す。

「……」

こつそりと目立たないように近くにある壁の方に足を運び、壁に手を付ける。

手を離し、壁には五芒星のような形をした『マーキング』が施されていた。

「……よし。行くか」

そう呟きポケットに入れておいた地図を取りだそうとポケットに手を入れるが、ポケットには何も入ってはいなかった。

「……？」

慌てて制服の至る所のポケットに手を入れるが、何もなく、リュックに手を入れ探すが地図は入ってはいなかった。

(ちよつ冗談きついで……まさかこんな時に無くすとはついてないなこれ)

「はあ……仕方ない」

後ろの頭を掻きながら珍しく困ったような顔をする。

溜め息を溢し、地図なしで無事に星導館学園の寮へとたどり着くようそつと心の中で願ひ、足を進めた。

「……………は」

適当に道を進み気がつくと、今でも崩れそうな建物がそこら中に建っており、人は誰一人もいなかった。

「……………迷った」

レイはまた溜め息を溢し、辿ってきた道を引き返そうと背を向けると、どこからか人の話し声が聞こえた。

「……………やめ……………」

「……………おい……………押さえとけ」

声が聞こえる方向に急いで駆け込み、様子を覗う。

帽子を深く被った栗色の髪の少女を囲うようにガラが悪そうな人が十人程の男性達がいいた。

(うわっ、やばい所を目撃してしまったな……………まあ目撃した以上ほつとくのもなんだし、助けるか)

今にも少女に襲い掛かろうとする人達の前に出る。

「ちっ、まさか人がいたとは」

「どうします?」

「無論、排除だ」

「了解」

リーダー格と思われる男性は、部下にそう指示しレイに攻撃し始めた。一人の男性がレイと目を合わせると突然、力が抜けたように膝から倒れる。

瞳には、赤く染まり瞳孔を囲うように三つの黒い勾玉が配置されている——うちはが持つ写輪眼に変わっていた。

「な、何だどっ!?!」

リーダー格は部下が倒れた事に驚く。

(相手するのも面倒くさいし、幻術で眠らせるか)

「……………はあ……………取りあえずあんたら眠っとけ」

男達に聞こえるように言葉を発し、男達はレイの目を合わせると少女を除く全員がバタバタと倒れ始めた。

そんな倒れていく彼らを冷ややかな目で見つめ、この場から立ち去ろうとした時、少女から呼び止められる。

「ま、待って!」

「……………」

少女の呼びかけに進めていた足を止めた。

「あの、助けてくれてありがとう。何かお礼をさせて」

「……いや、大丈夫なんで」

そう言い立ち去ろうとするレイを止めるかのように少女は彼の袖を持つ。

レイは一度少女に振り向き改めてて姿を確認する。

丁度雲に隠れていた月は、何時の間にか出ており、月光が2人を照らす。

少女は息をのむほどに整った顔立ちをしており、見間違える筈がない幼なじみの顔をしていた。

「えっ、『レイ君』?」

少女はレイの顔を見て驚いた。

「……シルヴィイ?」

レイは幼なじみの愛称で少女に呼ぶ。すると少女は目を目一杯見開いたと思えば、目に涙を溜めレイに勢いよく抱きつく。

「! レイ君!!」

突然抱きつかれたレイは少し慌てるが、念の為少女に確認をとる。

「……シルヴィイなのか?」

「うん! レイ君の幼なじみのシルヴィイだよ」

「……………そうか。久しぶりだな、シルヴィ」

抱きついていている彼女を拒絶せず、昔にやったようにそつと背中にも手を回し、片方の手は手慣れていたかのように頭の方にやり撫でる。

「!?……………うう、ひつぐ、……………レイ君」

我慢が出来なかつたのかシルヴィアは号泣し、レイの胸に顔を押し付ける。

「……………」

そんな彼女に泣いている子供を慰めるような手つきで撫で続ける。

「会いたかつたよ〜……………うええん！　レイ君〜！」

「……………ああ」

「ミナト君！　ミナト君！」

シルヴィアはレイの名前を嬉しそうに連呼しながら、より一層強く抱き締める。

「えへへ」

何時の間にか泣き終わり、もの凄く幸せそうな顔でレイに頬ずりをする。

「……………甘える所は相変わらずだな」

「だって、レイ君を見るとつい甘えたくなるんだもん。それに五年ぶりに再開したんだからその分甘えても良いよね？」

「……………」

ミナトは無言で頷きシルヴィアはさつきより甘える。

そんな世界の歌姫と呼ばれる彼女は、人気が高くファンは大勢いる。もしこの場面を見られたらファン全員からの殺意を浴びることになるだろう。

「えへへ、レイ君」

（アスタリスクに来て、地図を無くしたと思えばまさかシルヴィイと此処で再開するとはな。運が良いのか、悪いのか……まあ今はこの甘えん坊の相手でもするか）

第三話

「……落ち着いたか？」

「う、うん。ごめんね」

「……いや、こんな事で謝るな……そういえばその髪は能力か道具かで変えてるのか？」
「うん」

シルヴィアは帽子を取りヘッドフォンを耳に装着すると、栗色の髪から美しい紫色の髪に変色した。いや写輪眼で見る限り、そう見せただけのようなのだ。

その姿にレイは、思わず見とれてしまう。

「……暫く見ないうちにまた綺麗になったな」

真つ正面からその言葉を言われたシルヴィアは鳩に豆鉄砲を食らった顔をしたかと思えば顔が真つ赤になり俯く。

「も、もういきなりはずるいよ。でもありがとう」

シルヴィアは顔を上げ笑顔を向けると、レイはなにかを押さえ込んでいたもの溢れ出すような感覚に襲われ目頭が熱くなり何かが頬につたう。

（ああ、この笑顔だ。俺が守りたかったものは大切な人が見せる心の底から笑っている

明るく眩しい笑顔だったんだ)

「み、レイ君、どうしたの?」

シルヴィアは心配そうに顔を不安そうにさせ、レイに呼びかける。

「? 何が」

「レイ君、泣いてるよ?」

「……え?」

「しまった!?!」

ミナトは自身が泣いている事に気づいた。

(あの疑似体験であるの三人が自身よりも大切である事を身をもって気づかされた……そうだ世界に“絶望”し、皆を殺した奴らに殺意が湧きそして“憎んだ”)

「——君——」

(は? どういうことだ。確かにあの時は絶望と憎悪……負の感情に? まれる程大きかった……なの……なの……なの……今は、それが余り……ない? いや薄くなっている?)

「レイ君!!」

「!? あ、ど、どうした?」

「だ、大丈夫? 顔を真っ青だよ?」

「……あ、ああ、大丈夫だ」

レイは一旦、この薄くなっている負の感情について考えるのをやめる。

(そんな不安そうな顔をしないでくれ。お前には笑っていて欲しいんだ)

安心させるようにと優しい手つきでシルヴィアの頭を撫でる。

「ふにゃ〜」

シルヴィアは、だらしなく顔を崩す。その顔を知るのは世界でレイしか見せないそんな顔をしていた。

「……さて今は、ゆっくり話でもしたい所だが」

レイは撫でるのをやめ、シルヴィアから少し距離をとろうとするが、離すまいと強く引っ付いているため中々離れない。

「そういうえば何でここにいるの?」

「……その事に話したいから一旦離してくれ」

シルヴィアは渋々と不満そうにしながら抱きつくのをやめた。

「それで何でここに?」

「……俺、明日から星導館に転入する事になった」

「!? じゃあ」

「……ああ、また会えるかもな」

シルヴィアはまた抱きつこうとする。レイはシルヴィアの頭を抑え阻止する。

「……まだ、話は終わってない」

「むー」

地図を無くしたと挙げ句迷ってしまった事を説明すると、クスツと可笑しそうに笑いだす。

「ふふつ、そういう抜けてる癖は昔と変わらないね」

「……そ、それで星導館は何処か教えてもらいたいのだが」

レイは歯切れを悪くし、場所を聞く。

「うん、いいよ。なら私が案内でもしようか？」

「……いいのか？」

「久しぶりの再開なんだし、出来るだけ長く一緒にいたいもん」

「……そうか。じゃあ頼む」

「うん！」

シルヴィアは元気よく頷き、レイの手を引つ張りこの場から離れた。

「……そういえばシルヴィは何故あんな所に？」

そう歩いて行く中、レイは何気なくそう聞き出す。

そしてシルヴィアは明るかった表情から暗い表情に変わりながらも答えた。

「……………ウルストラを探しているの」

「……?! ウルスラさんを？」

「うん」

「……俺がいない間に何があんだ？」

「あれから、ウルスラに歌や格闘技を教えて貰っていただけ、ある日突然連絡が途絶えたんだ。」

「……そうか。なら俺を案内するよりもウルスラさんを探した方が——」

「ううん。今は目の前にいる大切な人が優先だよ」

そうシルヴィアは笑顔で返すが、レイは少し顔に陰が生じたのを見過ごせなかった。

「……話聞くぞ」

「いや悪いよ。レイ君には迷惑かけたくないし」

「……迷惑なんて微塵も思っていない。シルヴィが困っていたら何とかしてやりたい」

「！ 本当に優しいよね。レイ君は」

「……まあ嫌なら話さなくてもいい」

「そういう所だよ」

シルヴィアは昔の事を思い出しながら懐かしむように、ふふつと笑う。

「？」

れいは、シルヴィアの言っていること訳が分からず首をかしげた。

「うん、レイ君。聞いてくれる？」

「……ああ、その話は誰にも聞かれたくない内容？」

「うん。出来れば」

シルヴィアを人目のつかない路地裏に連れ、印を結び影分身を一体出す。

「影分身？」

「……ああ、案内する必要はなくなった。シルヴィ、悪いが星導館までの行き先を大体でいいから教えてくれ」

「……頼んだぞ」

「……ああ、そっちもな」

そう分身は言い残すと一瞬で消えていった。

「……さて、俺達も場所を移そう」

レイは目に大量のチャクラを送り込み、瞳が三つの勾玉模様が表れ、渦を巻くような形の陰に変形した。

「えっ、その目は」

シルヴィアは考える時間もくれずに一瞬で左目の固有術である神威で神威空間に飛ばし、自身も移動する。

「……は……それにレイ君、その目は？」

レイの万華鏡写輪眼の左目の固有術である神威によって作られた空間の目の前には、一部屋分くらいの大きさをしたカーペットが敷いてありカーペットの上にはテーブルが置かれ、それを囲うようにソファやローソファが設置されていた。

「……………これは、いつか話す」

（この目の開眼したキツカケなんて口が裂けても言えない特にシルヴィと……………あの二人にはな）

目にチャクラを送るのを止め、万華鏡写輪眼を解除し、黒眼に戻す。

「……………すまないが強引にこの空間に送らせてもらった」

「う、うん。えつ空間？」

「……………今は置いといて、そこのソファでも腰掛けてくれ」

「あ、うん」

「……………飲み物はコーヒーでいいか？」

レイは二人分のマグカップにコーヒーを入れながら、そう聞いた。

「うん。ありがとう」

「……………シルヴィ、分かって聞くが探知系の能力は試したのか？」

シルヴィアが魔女であり、その能力が歌を媒介にして自身のイメージを変化させられる。そしてそのイメージを内包する歌を歌えばあらゆる事象を呼び起こせる万能の力

ということとは知っている。

それなら探知でも可能なのではと、レイはそう考えた。

「私の能力でもある程度範囲を絞り込まないとダメ。原則的に対象範囲によつて消費する星辰力の量が変わるからね」

「……そうか」

入れ終えたコーヒーをシルヴィアの方に置く。そしてシルヴィアは礼を言い、マグカップを手に取り口につける。

「ウルスラはアスタリスクに行くって言ってたから、範囲としては問題なかったし——」

レイは、その先のシルヴィアの台詞を予想してたかのように遮る。

「……結果として、反応はあったと」

「うん。でも、どうしてもその先が絞り込めないの。アスタリスクにいるのは間違いないんだけど」

「……だが何故あそこ何だ？」

疑問に思ったことをシルヴィアに問う。

「……ウルスラは…… “蝕武祭” に出場してたみたいなの」

「………蝕武祭？」

「あはは、レイ君はここに来たばかりだから当然知らないよね」

シルヴィアは苦笑いしながらも、レイに分かりやすく説明する。

「蝕武祭は、非合法・ルール無用の武闘大会。ギブアップは不可能で、試合の決着はどちらかが意識を失うか、もしくは命を失うかによって決まるそんな武闘大会なんだ」

「……………そんな武闘大会あったんだな」

「でも蝕武祭を捜査を担当したヘルガ等星獵警備隊によって潰されたんだ」

「……………ヘルガ？」

「ヘルガ・リンドヴァル。星獵警備隊の創設者にして、現在も隊長を務める女性の人」

「……………そうか」

「話を戻すね。あそこは、再開発エリアは一番有力な場所なんだ」

「……………なる程……………ん？ そんな所に俺は迷っていたのか」

「……………蝕武祭に参加していたその人がいたとしたら再開発エリアが一番有力な場所なんだな」

レイは簡潔にまとめ上げる。

「うん。そういう事」

「……………この後また再開発エリアで探すのか？」

「……………うん」

レイは吐息をし、納得したような顔をする。

「……事情はある程度把握した……もし良ければ探すの手伝うぞ」

「え、でも、流石にそこまでは」

「……」

シルヴィアは、ミナトに真っ直ぐ見つめられ、しびれを切らしたのか。

「……分かったよ。お願いします」

シルヴィアはそう言っ、そつと胸に手を当てた。

その言葉から、レイはシルヴィアが本当にその人の事を強く想っていることが伝わってくる。

「……」

シルヴィアはまだ顔を曇らせていた。その顔を見たレイは困ったような悲しみを含めた顔をする。

「……俺も全力で探すからそんな顔はしないでくれ。昔からお前には笑った顔が凄く似合ってる」

ミナトはそつと頭に手をやり、撫でる。

(小さい頃は、落ち込んでいたこいつににこうやってよく慰めていたもんだ)

「っ、もう本当にずるいんだから」

シルヴィアはそのまま撫でられ口元を緩み、レイの方にそつと抱きつく。

「……………」から出るぞで」

万華鏡写輪眼を発動させ、左目の能力である神威で自身が先に出て、シルヴィアを神威空間から出した。

第四話

(……駄目だったか)

再開発エリアの出口にいるレイは、ため息を吐いた。

二時間、影分身三十体にシルヴィアと本体であるレイが探してもウルスラの情報と手がかりは一切見つけれなかった。

「私もずっと前から探してるけど全然手がかりが見つからないからそんなに落ち込まなくて大丈夫だよ。それにレイ君の影分身で調べにくい所も調べられたから大助かりだよ。ありがとう」

「あとアスタリスクに来たばかりなのに付き合わせてごめんね」

申し訳なさそうに頭を下げ、謝る。

「……だから謝るな。俺が出来る範囲内であれば大抵な事は協力してやる」

シルヴィアは考える。想い人からの協力は素直に嬉しい、だが何故底まで自身に協力してくれるのか、を。

「……………ねえ、なんで底まで私に協力してくれるの？　いくら幼なじみでもレイ君にメリツトなんて——」

その先の台詞を言わせないようにシルヴィアの唇を人差し指で押さえる。

「……簡単な事だ。覚えてるか？ あの頃お前が俺に言つてた、困っている人をほっておけない」という言葉そっくりそのまま返す」

「え？」

漆黒に染まつてる瞳がシルヴィアのアメジストの目をしつかりと捉える。

「……それに、俺にとって、お前という存在はかけがえのない存在。だから協力する。それだけ」

そう答えると、シルヴィアはますます顔が赤く染まり上げ、それを隠すようにと俯き肩をプルプルと震え出す。

「あーもうっ……！ そんなこと言われたらますます好きになっちゃうよ」

レイに聞こえないよう声量でボソツとシルヴィアは呟く。

恋を寄せている相手からそんな言葉もらえたのだ。当然、羞恥から血が頬に上がってくるのを感じ、この上ない喜びだ。

「……すまん。今なんて」

シルヴィアの声が聞きとれなかったのか、レイは聞いた。

「大丈夫。いずれ分かる時がくるから」

そう言いながら深呼吸をしを落ち着きを取り戻し、顔を上げ含みのある笑顔を向け

る。

「？」

「さて、そろそろ帰らないとペトラさんに怒られるから帰らなきゃ」

「……送ろうか？」

「……え？ でも」

「……いい機会だ。確かシルヴィはクインヴェール女学園に所属してるよな？」

「うん。一応その学園の序列一位で生徒会長を務めているよ」

ドヤ顔しながら可愛らしく胸を張る。

「……知ってる、有名だからな。それで送ろうか？」

シルヴィアは今は世界の歌姫と言われるほど有名人であり、人気トップアイドルだ。知らない人は極稀だろう。それ程有名人なのだ。

「んー、レイ君が良ければお願いしようかな」

「……じゃあ行こう」

「うん」

再開発エリアを背にし、シルヴィアに付いていきクインヴェール女学園に向けて歩き出した。

暗い夜道の中街灯の明かりを頼りにし歩くこと三十分、ようやくクインヴェール女学

園らしきの校舎が見え始めた。

「……ここがクインヴェール」

薄暗くても明るくきらびやかな校風だと分かる。

「うん、ここがいいよ。送ってくれてありがとうねレイ君」

「……いや、序列一位でいくらお前が強かろうが、可愛い女の子がこんな夜道を歩き回るのは危険だからな」

「……っ！ しれつと口説くんだから」

「？ 正直に思った事をそのまま言ったまでだが」

「……はあ、この天然たらし」

シルヴィアは呆れて、ため息を溢す。だがその顔はまんざらでもない様子だ。

「……よく分からんが。以後発言に気を付ける」

「本当に〜？」

頬を膨らまし、疑い深いそうな目でレイを見る。

「……………善処する」

「まあ、私ならウエルカムだけど」

「……………そうなのか？」

「い、いやいや何でもないよ！ それよりもクインヴェールに何か用があるの？」

レイに聞かれていたのか慌てて誤魔化し、話をそらす。

「……なに、大した事ではない」

そう言い、校門の近くにある電柱に片方の手のひらをつける。

「？」

シルヴィアはレイの意図が分からず、キョトンと首をかしげる。手を離すと、電柱にはマーキングが施されていた。

「五芒星のマーク？」

一瞬言うか言わないかで迷ったが、別に知られても何も問題ないと判断し、教えることにした。

それにシルヴィアは小さい頃からレイを見ている事もあって「うちは」と「千手」そしてチャクラについても知っていた為隠す必要はない。

「——シルヴィイなら話しても問題ないか」

そう吐き捨て、電柱に施したマーキングにそつと触れる。

「？」

「……これはマーキング」

「マーキング？」

「……この印さえつけられ距離の長さ関係なく瞬間的に移動が出来る」

「そ、そんなことが出来るんなんで、でも距離に比例して星辰力は——」

「……問題ない。星辰力以外の“力”を使えばの話だ」

「んーあつ。昔言つてたチャクラっていうエネルギーの事？」

「……よく覚えてるな」

「まあね。じゃあその瞬間移動するのも忍術？」

「………忍術だな。詳しく今度会う時に話すよ」

「えー」

「……もう今夜は遅い。諦めてくれ」

「分かった……あ、そうだ。次に会うとき必要になるかもしれないから、連絡先を渡すとくね」

そう言いながら、携帯端末で空間ウィンドウを開き、自信の連絡先を送る。

「……シルヴィ、これを渡す」

「御守り？」

渡されたのは、五芒星の形が入った手の平に収まる程の御守りだった。

「……もし、俺を呼び出したときは、星辰力をそれに込めれば瞬時に駆け付けられる……
ただし、緊急事態の時だけな」

「肌身離さず？」

「……出来るだけ」

「うん、ありがとう。大切にするね……じゃあまたね」

「……ああ」

シルヴィアはとても嬉しそうに御守りを握りそう言って校門の中に入って行った。
見送ったミナトは今日の一日の出来事を思い返す。

(………全く一体何処で何をしてるんですかウルスラさん……シルヴィがとても心配してましたよ)

「………本当何処にいるんだか」

(………さて影分身で星導館の場所も分かかったことだし、今夜は神威空間で寝泊まりして明日の朝には……確か生徒会長室に行けば良かったよな?)

レイは密かに万華鏡写輪眼を発動し、自身の左目中心に吸い込まれ消えていった。

第五話

「こいつが転入生のうちはレイだ。適当に仲良くしろよ」

釘バットを手に持ちレイに向けながら、そう紹介したのはこのクラスの担当教師である八津崎 匡子だった。

「席は空いてるところにすわってくれ」

レイは指定された席まで歩き、席についた。

「それじゃあHR始めるから静かに聞け」

HRが始まり何事にもなく普通に授業を受け昼休みの時間帯になるとミナトは食堂で食事を済ませようと教室から出た。

「〃兄さん〃 久しぶり。元気だった？」

「……〃ハルト〃」

名は「うちはハルト」レイ双子の弟である。しかし黒髪黒瞳だが瓜二つという程似ている訳ではない。

「転校生だと聞いて見に来たらその転校生が兄さんだったとはね」

「……ああ、3年ぶりだな」

「うん。久しぶりの再開でゆっくり話したいところけどここじゃあなんだし食堂で話そう」

ハルトの提案に無言で頷き、二人は食堂に向かった。

食堂で昼食をすまし何気ない雑談してる最中、突然レイは試合を申し込まれる。

「そうだ兄さん試合しようよ。この3年間でどれ程の力をつけたのか知りたいしね」

「……放課後でいいか？」

「うん。じゃあ放課後兄さんの教室に迎えに行くから待つてて」

「……………」

この後、各自の教室に戻り午後の授業を受け、放課後レイとハルトは訓練用のドームで数メートル離れた位置で対面するような形で立っていた。

「……………」

「……………」

二人の瞳には既に写輪眼が発動していた。お互い微動だに動かないまま数秒間、開始のブザー音が鳴り響く。それと同時に一斉に二人は距離を縮め肉弾戦が行われる。

肉弾戦がしばらく続くのだが客観的にレイは防戦一方。しかし防戦一方だった筈の

レイは徐々に攻勢に転じ始め、瞬く間に互角に打ち合っていた。

「火遁・鳳仙火」

背後に飛び、素早く印を結び5つの小さな火球を口から吹き出す。火球を難なく躲すハルト。しかし躲されるのを分かっていたかのように瞬時に右手に入り込み蹴り飛ばした。

「火遁・火龍炎弾」

蹴り飛ばされたハルトに追い打ちをかけるよう凄まじい勢いで火龍がハルトを飲み込もうと襲い掛かる。

「水遁・水龍弾の術！」

蹴り飛ばされたハルトは、空中で術を放つ。放たれた水龍と火龍が衝突、火と水が混合し急激な蒸発によって霧が発生される。

「手裏剣影分身の術！」

霧の中、一枚の手裏剣が大量に生産され無数の手裏剣が前方からレイに迫る。

（おいおい霧で視界が悪いっていうのに無数の手裏剣とか防げる訳がな……くはないか）

腰に差していた刀を抜刀し、飛んでくる手裏剣を写輪眼で見切り次々と弾いていく。

（——っ!?!）

突如、四時方向に振り向いたと思えばそこには自身を目がけて剣型の煌式武装を振り

上げているハルトがいた。反射的に刀で煌式武装の一撃を受ける。

レイはそのまま刀で煌式武装を押しつけ、凄まじい速さの剣撃が見舞う。

霧は晴れており互いの剣技と剣技がぶつか合い火花を散らす。しばしの斬り合いでようやく決着はついた。

武器を弾き飛ばしハルトの首筋に切先を突きつけるレイ、誰が見てもミナトの勝ちだと皆は断言するだろう。

「残念」

そうハルトは小さく一言こぼすと、煙を上げ消える。

「——火遁・豪火滅却！」

声が出た方向には、フィールドを覆い尽くす程の超広範囲の炎がレイに迫っていた。何とか回避を試みるが既に遅し、なし術もなく呑み込まれてしまった。

（よし！　いくら兄さんが速かろうとこの広範囲の炎じゃあ避けられない！　これは勝った）

そうハルトは心の中で確信付いた瞬間——

「……今のはヒヤツとしたぞ。危なかった」

背後に少し焦ったような声が聞こえたと思えば首筋に刀をつけられていた。

「……まだやるっ？」

「いや、参った」

終了のブザー音が鳴り、ハルトの降参で勝負はついた。

レイ納刀し、二人は写輪眼を解除した。

「あーあ、勝てると思ってたんだけどなー」

「……そう簡単に勝ちには譲るかよ。てかお前、あの豪火滅却、俺を焼き殺す気満々じゃないか」

「ごめんごめん。そう言えば最後のどうやって避けたの？」

「……時空間忍術——飛雷神の術と言えば分かるか？」

術の名を聞くとハルトは軽く驚く。

「まさかあの飛雷神の術を会得してるなんて……ん？ その術ってマーキングしたところしか飛べない筈なんじゃ」

ハルトの背中にそつと指さす。

「……序盤の時に印を施した」

序盤での肉弾戦中、レイがハルトの背中に触れる機会があった。おそらくその時にマーキングをつけたのだろう。

「あの時か。マーキングつけられた時点で僕は負けてたつてことだね」

「……いや、そうとも限らない。もし俺が飛雷神を使えることをお前が知っていたら別

の結果になっていたかもしれない」

「まあ、『公式序列戦』では勝ってみせるよ」

「……公式序列戦？」

「うん。月一回にあつてねそれが今月に行われるのは来週なんだよ」

*

その後、ハルトは借りていた訓練用のドームの返却のため必然的に二人は別れることになり、レイは夜道を歩いていった。

（公式序列戦とか面倒くさいなあ。出来れば極力目立ちたくはないんだが。どうせ『王竜星武祭』で目立つことになるかもしれないし仕方ない、か）

目立ちたくない彼にとって序列戦、または星武祭など出場する気など更々無かった。（たく王竜星武祭に出場しろってどんな任務なんだよ）

レイの父であるヤヨイに王竜星武祭で出場するよう命じられ、勿論最初は断つたがどうしてもと押しきられ渋々と承知したのだ。

「――！」

（ん？）

夜道を歩いている中、何やら女性の声が聞こえた。ふと何事かと気になり様子見に行くと、街灯で照らされている美しい二人の少女がいた。

「——せめて……自分を滅ぼすような戦い方はやめろ！」

そう必死に説得してるのは見覚えがある鮮やかな薔薇色の髪をした少女。

(……あの特徴的な薔薇色の髪は……… “ユリス”)

「……望みを叶えたいなら……決闘で……私に、勝つて！」

そして説得する少女を聞き入れない様子であるのは、雪のように染まった真つ白な髪をした少女だった。

(ユリスが言い寄るあの子……あんな真つ白な髪をした女子は見覚えがない。しかしあの顔立ちは……間違いない、“オーフェリア”だ)

久方に大切な二人の顔を見て、喜ばしさがこみあげてくるがあの疑似体験がフラッシュバックし、思わず苦虫をかみつぶしたような顔をする。

(……落ち着け……今は感傷に浸るところではない。オーフェリアのあの変貌はなんだ？ 彼女は“非星脈世代”だった筈、それにあれは毒の瘴気か?)

写輪眼でオーフェリアを映すと、彼女から漏れ出ている瘴気と星脈世代が持つ特殊なオーラである星辰力がハッキリ見えることから分かった。

「——ううあああ——!!」

ユリスはホルスターから細剣型の煌式武装を取り出し、展開したかと思えばそのままオーフェリアに突っ込み出す。

オーフェリアから底知れぬ星辰力が開放され、大気が鳴動する。指向性を持たされた万応素によって元素が変換され、事象が呼び起こされる。

オーフェリアは毒の瘴気を巨大な手の形とし、突っ込んでくるユリスを払おうとする。

(つまずい！)

あの巨大手に触れたら危険と感じ、神速の如くユリスに駆けつけ彼女を横抱きにし巨大な手から逃れる。

「ふえ？」

自分が誰かに横抱きされていることに気づき羞恥心により赤面し、助けてもらった人物に下ろすようにとその人物の顔を見てユリスとオーフェリアは驚愕する。

「……………?!」

「き、貴様!! 何者だ! とにかくおろ、せ?」

何せその人物という者は、彼女らにとつて最も愛する彼だったから。

「……………久方ぶりだな。ユリスにオーフェリア」

第六話

「み、レイなのか？」

ユリスの目には想い人の顔が映る。なぜ、ここに？　と思わぬ人物の再開に驚きつつ、心の底から湧き出る歡喜で頬をゆるむ。

レイは腕の中にいるユリスに本人だと軽く頷き、彼女をそつと下ろし、そしてオーフェリアに目をやる。

「……ユリス。彼女は……あいつはオーフェリアで間違いないよな」

「っ……あ、ああ。紛れもなくあいつは、オーフェリアだ」

レイが知るユリスは強気で真つ直ぐである少女だった。しかしそう返答するユリスは珍しく弱々しいと見た。

そんな彼女に軽く頭を撫でる。

「……ユリス。一度俺に任せてくれないか？」

「！ ああ、頼むっ」

ユリスは悔しかった。オーフェリアを何度、説得しても聞き入れてくれなかった。そしてやむ得なくレイに頼る術しかなかった。

レイはユリスに任され、一歩前が出る。

「……レイ」

「……オーフェリア」

久しぶりの再開で喜びを噛みしめ、今にも想い人に飛びつきたいが、自身から漏れ出る瘴気で彼を傷けたくないばかりにぐつとこられる。

(……あの目……この世に絶望している目だ。しかし心の底からは助けを求めような)

顔に影を差し、今にも泣きだしそうな悲しい表情を浮かべるオーフェリア。かつての眩しい笑顔が溢れる少女の面影が見られない。

瘴気について彼女を観察していくと、

(……成る程、膨大すぎる星辰力のせいで漏れ出ている瘴気が抑えられないようだ。しかもその瘴気がオーフェリアの体を少しずつ蝕んでいつている)

「……どうやらその瘴気、制御できないようだな」

「……ええ、何度も制御しようとして努力したけれど無理だと痛感したわ……なぜならこれは私の運命なのだから」

何もかも諦めきった顔をし、そう答えるオーフェリア。

「……そんな運命苦しくはないのか？」

「……」

「……その毒の瘴気が漏れ出ている限り、人の温もりや愛する花さえも触れれない……そんな運命苦しくはないのか？」

レイのその言葉に心が揺すぶられ、今まで抑さえ込んでいた感情が溢れ出し、目頭に涙がたまる。

「つ………そんなの、そんなの苦しいに決まってるわっ」

「………ならその運命、俺が変える」

「………無理よ。いくらあなたでも私の運命は抗えない」

「………手はある」

そう不安そうに見つめるオーフェリア。その目には全てを諦めきった絶念はなく、僅かな希望の光が宿り、期待の眼差しをレイに向ける。

「………場所を移そう。二人とも俺に掴まってくれ」

*

場所は再開発エリア、辺りは廃墟となった建物が並んでいるというより瓦礫の山や今にも崩れそうな建物がほとんだ。

「け、景色が変わった？」

「……」

突如、景色が変わり二人は目をパチクリさせる。

「……今からやることはオーフェリアが制御不能の分だけの星辰力を一度封じる」

「封じる……そんなこと可能なのか？ ……いやお前ならばあり得んことはないか」

「……ええ、レイだもの」

（え、何。俺だからって理由ですまされるの？ ……まあ、確かにうちはと千手が扱う忍術は特殊だから無理もないか……でもこんなやり取り、懐かしい。おっと今は封印についてだ）

「……オーフェリア、今星辰力を何割くらい制御出来る？」

「……半分、くらいかしら」

そう落ち込むように言うオーフェリア。レイは問題ないとばかりに首を横に振る。

「……そんな顔をすんな」

そんな彼女を抱き寄せる。

「……！ レイ駄目よ。瘴気があなたを——」

離れようとする彼女を、子供をあやすように背中を撫でる。

「……気にすんな……よし、残り半分は俺が封印する。そして晴れて愛する花に近づく

そして二人でコントロールしてる間、レイは封印に入る。

「そういうことか、承知した。全力でオーフェリアのサポートに入るとしよう」

「……ありがとうユリス」

迷うことなく、サポートすると言うユリスに感謝の言葉を言う。

「……すー……ふー……っ!!」

一度深呼吸を行い、一気に「星辰力」と「チャクラ」を同時に練り上げ、印を結び始めた。その間に練り上げた星辰力とチャクラを練り合わせる。

星辰力とチャクラが練り合わせた《煌星術チャクラ》が表に現れ、青く煌めくモヤツとしたものがレイ全身を纏う。

莫大な星辰力とその姿にユリスとオーフェリアは目を見開き驚愕する。

印を結び終わると、右手に赤い炎のようなものが宿り出す。

「……準備は整った。二人にはこれを」

レイはオーフェリアとユリスの触れると、星辰力とチャクラを練り合わせた、煌星術チャクラが彼女らを纏う。

「む、これは」

「………温かい」

(まるで、レイ包まれてるように感じるわ)

「……それは、瘴気で体を蝕むのを防いでくれる。安心してコントロールに集中してくれ」

「……レイ」

「……オーフェリア、手袋を脱いでくれるか？」

オーフェリアは手袋を脱ぎ捨て、肌をさらす。その肌から瘴気が漂うが、煌星術チャクラが彼らを守る。

「驚きだ。まさか本当に瘴気から守ってくれてるとは」

「……ええ」

オーフェリアの右手にはユリスが、左手にはレイが手の指が絡むような握り方をする。

ユリスはオーフェリアのコントロールの補助、レイは封印。

「……これより封印術を行う——」

オーフェリアは星辰力を全部解放し、封印が始まった。

「——《封印術・多重星辰封縛》」